

東入部遺跡群 3

— 東入部遺跡群第6次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集



1994

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄海灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されてきました。それらを保護し後世に伝えていく事は、言うまでもなく私共の務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつある事も事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録保存に努めております。

本書は、平成4年度に実施した道路幅にともない調査した東入部遺跡4次調査の記録を報告するものです。調査では、縄文時代から中世にいたる数多くの遺構と遺物を発見しました。この結果、この地区の歴史、および他地域との交流についての問題も明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くのかたがたのご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は国道283号線拡張にともない、福岡市教育委員会が1992年8月3日から9月4日にかけて発掘調査を実施した東入部遺跡第6次調査の報告書である。
1. 本書では遺構の表記をSK-土坑、SD-溝、SP-ピットとした。
1. 本書使用の方位は磁北である。
1. 本書使用の遺構実測図は、池田祐司を中心にして作成し、作業員の方々の協力を得た。
1. 本書使用の遺物実測図は、山口亨、池田による。
1. 本書使用の挿図の製図は、安野良、副田則子、伊藤美紀、山口、による。
1. 本書使用の写真は、遺構を池田が、遺物を平川敬治が撮影した。
1. 本書の作成にあたっては先に挙名した他、上田保子、前田みゆき、井上真由美、城山愛の協力を得た。
1. 本書の執筆は、Ⅲ3.(4)の一部を山口が、他を池田が行った。
1. 本書の編集は池田が行った。

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II立地と環境	3
III発掘調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 地層	5
3. 遺構と遺物	7
(1) 士坑	7
(2) 溝状遺構	10
(3) ピット群	12
(4) 縄文時代包含層	12
IVおわりに	25

挿図目次

第1図 周辺の遺跡 (1/75000)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (1/8000)	3
第3図 調査区位置図 (1/1000)	4
第4図 1区北壁、東壁土層図 (1/80)	6
第5図 調査区全体図 (1/200)	8
第6図 SK001、003、004、005、008、009実測図 (1/40)	9
第7図 SK023実測図 (1/40)	10
第8図 SK010、024、027、1041、011、021実測図 (1/40)	11
第9図 ピット出土遺物実測図 (1/3)	12
第10図 縄文時代遺物出土分布図 (1/150)	13
第11図 包含層グリッド土層図 (1/40)	14
第12図 縄文時代包含層出土遺物実測図 1 (1/3)	15
第13図 縄文時代包含層出土遺物実測図 2 (1/3)	16
第14図 縄文時代包含層出土遺物実測図 3 (1/3)	17

第15図 繩文時代包含層出土遺物実測図 4 (1/3)	18
第16図 繩文時代包含層出土遺物実測図 5 (1/3)	19
第17図 繩文時代包含層出土遺物実測図 6 (1/3)	20
第18図 繩文時代包含層出土遺物実測図 7 (1/3)	21
第19図 繩文時代包含層出土遺物実測図 8 (1/3)	23
第20図 繩文時代包含層出土遺物実測図 9 (1/3)	24

図 版 目 次

- 図版 1 (1) I 区全景 (南から) (2) 2 区全景 (南から)
 図版 2 (1) S K001 (東から) (2) S K009 (東から)
 (3) S K003 (西から) (4) S K023 (西から)
 (5) 繩文時代遺物出土状況 (6) D11グリッド西壁
 図版 3 出土遺物 1
 図版 4 出土遺物 2
 図版 5 山土遺物 3
 図版 6 出土遺物 4

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市早良区大字東入部一帯に広がる東入部遺跡群は、1978年の福岡市教育委員会による遺跡分布調査により発見され、周知される事となった。1986年から始まったこの地域の県営圃場整備事業とともに埋蔵文化財の試掘、発掘調査により、この遺跡の遺跡が縄文時代から中世に及ぶ各時代の遺構が遺存していることも判明した。

平成4年5月21日には、東入部遺跡隣接地に、福岡市土木局道路建設課（以下「甲」とする）より一般国道263号線東入部地内道路改良事業にともなう埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けた福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下「乙」とする）では同年6月17、24日に試掘調査を実施した。試掘調査は申請地に7カ所のトレンチを設けて行い、申請地の北側に遺構と遺物の包蔵を認めた。この結果を受けて甲、乙両者は協議を重ね、建設にともない遺跡の保存は困難と判断し、発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の組織

調査委託：福岡市土木局道路建設第1課

調査主体：福岡市教育委員会教育長 井口雄哉（前任）

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾学 同第1係長飛高憲雄（前任）横山邦嗣

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 寺崎幸男

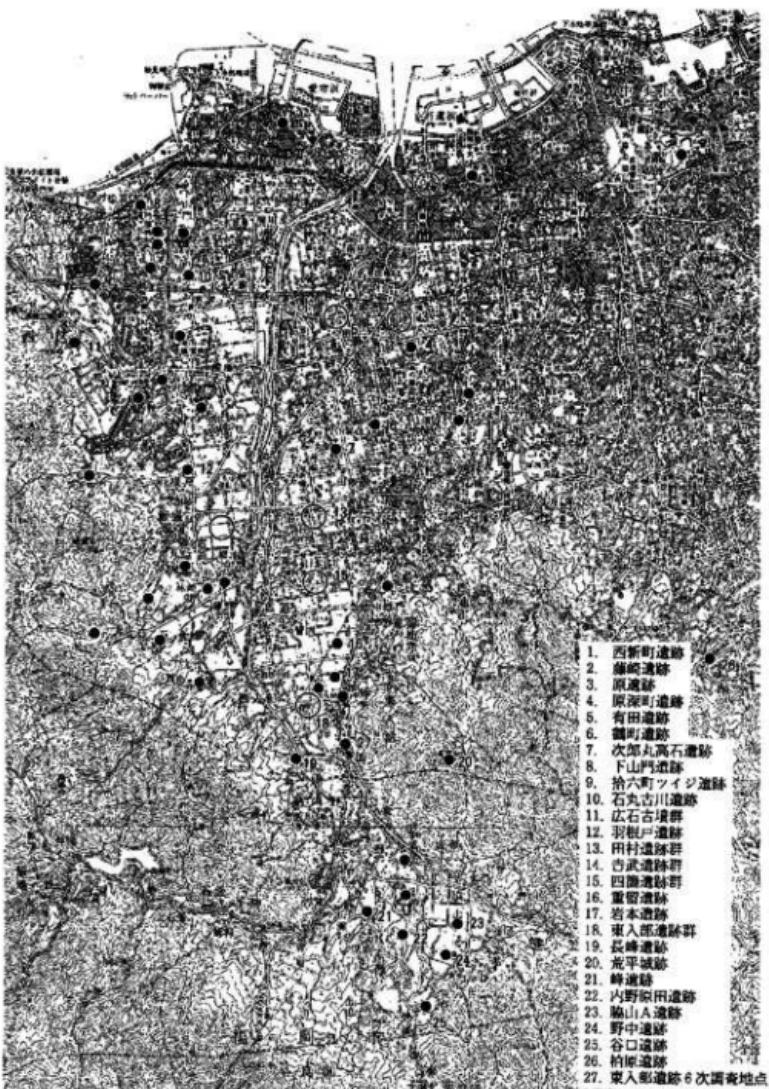
事前審査：主任文化財主事 井澤洋一 文化財主事 吉武学

調査担当：埋蔵文化財課第1係 池田祐司

調査作業：岩見敏子、大鶴タカ、岡部喜久美、緒方シマヨ、金子啓介、金子ヨシ子、川嶋ツキエ、菊地栄子、正崎由須子、清水邦子、鶴田喜美枝、林嘉子、平川土枝、平川富美子、平川信子、平川史子、平野ミサオ、細川友喜、森山宣子、山尾タマエ、山口タマエ、山田ヤス子、結城多美子、吉岡勝野

整理補助：山口亨（福岡大学）

整理作業：上田保子、前田みゆき、井上真由美、城山愛

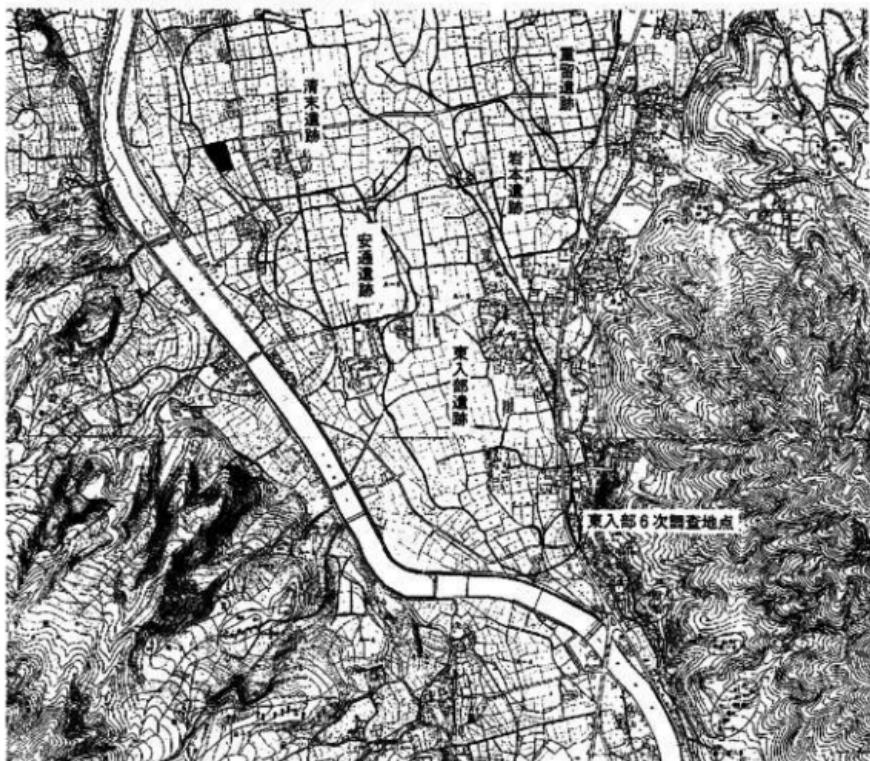


第1図 周辺の遺跡 (1/75000)

II 立地と環境

東入部遺跡群は福岡市早良区大字東入部に所在する。遺跡が立地する早良平野は背振山塊に源を発する室見川が北流、開析し、玄海灘に面している。平野部は南北約8km、東西約5kmでありおおよそ20kmの面積を有する。平野内には河口部を中心に第3期、洪積世丘陵、台地が残るが多くは未発達の扇状堆積が複合、形成されさらにそれを侵食し、あるいは覆って薄い沖積堆積物が認められる。

早良平野の中で東入部遺跡位置は南端にあり、袖山山塊の荒平山の西側山麓部に近い貞島川と室見川に挟まれた沖積地内にある。6次調査地点はこれまで知られていた遺跡分布範囲より南に位置し、貞島川と荒平山裾の間にある。



第2図 周辺遺跡分布図(1/8000)

東入部では近年、圃場整備事業に伴う発掘調査が行われ、具体的な遺跡の内容が明らかになってきた。正式な報告は未完であるが概要報告が示されている。詳細はそれらの報告にゆずり闇述する遺構、遺物をメモ的に並べるに止めたい。

縄文時代晚期を前後する時期では、1次調査において磨消縄文土器をはじめとする遺物が集中して出土している。2次調査では西平、北久根山式期の遺物、晚期終末の墓地が検出されている。その後の4次、7次調査においても遺構に伴うものではないが、後晩期の遺物が出土している。周辺の遺跡群においては、岩本遺跡、清末遺跡、安通遺跡、において当該期の遺物の出土が知られる。しかし、明確な遺構は少なく、やや北に位置する重留遺跡において晩期前半の竪穴式住居跡5棟、晩期中ごろの溝等が検出されている。

また、製鉄に係わる遺構としては、安通遺跡で鍛冶炉が、東入部遺跡4次調査で9世紀の製鉄、鍛冶炉が、7次調査において鍛冶炉を検出している。

参考文献

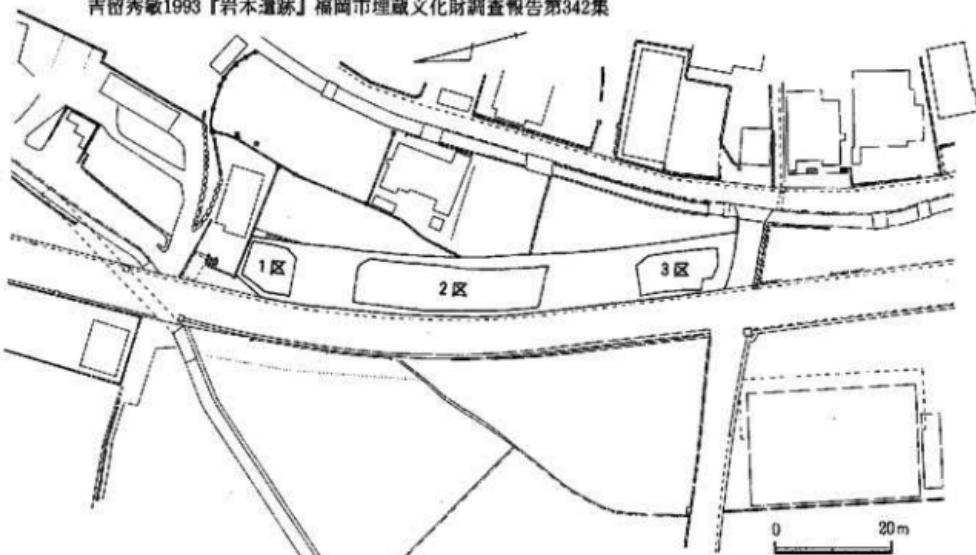
常松幹雄他編1990『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告第235集

井沢洋一1991『入部Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告第268集

長屋伸編1992『入部Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告第310集

浜石哲也他編1993『入部Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告第343集

吉留秀敏1993『岩本遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第342集



第3図 調査区位置図 (1/1000)

III 発掘調査の記録

1. 調査の概要

調査対象地は国道263号線に添っている。調査前は水田として利用されており、国道と同じレベルであった。

工事対象面積は道路に添った幅9から5m、長さ300mの範囲で、全体で2300m²であった。事前に試掘調査を行い、7本のトレンチを入れた結果、南側で100mは宝見川の旧河川内になり、北側80mに遺構が検出された。その間はシミ状のピットらしきものはあったが遺構と認められるものではなかった。このことから対象地の北側、834mについて発掘調査を実施することとなった。ただし国道から調査対象地の東の工場への生活道路2本を確保する必要があったため、この部分を残し、また安全確保のために周囲を1m弱残して調査を行った。調査区は生活道路で区切り3区を設定した。

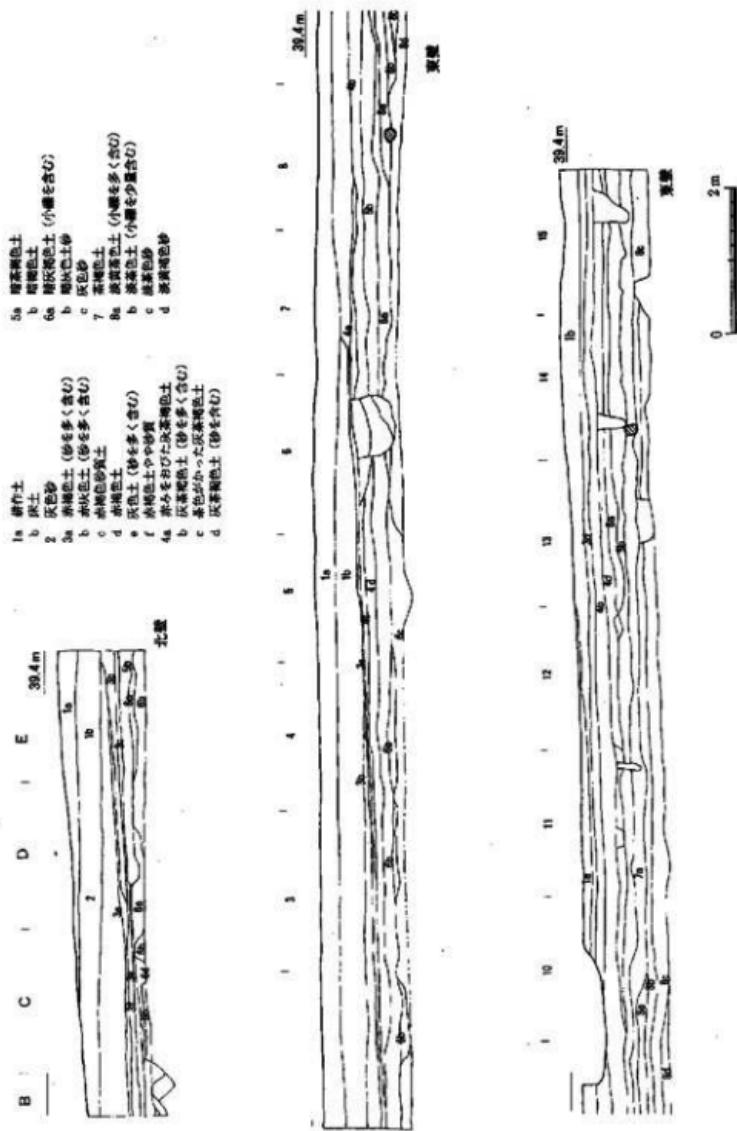
調査は最も面積の大きな2区から開始した。まず最上部の水田耕土、床土、茶褐色砂質土、暗褐色土を重機により除去、搬出し、黄褐色砂質土上面で遺構検出を行い、以下を手作業にて掘り下げた。その結果、溝、ピットなどと古代の土器片、縄文時代晚期の土器片が検出された。縄文時代の遺物は遺構内でも出土するが、遺構検出を行った黄褐色砂質土から出土しており、縄文時代の包含層と判断し、遺構の調査終了後掘り下げ、調査を行い多数の遺物を検出した。2区内で出た遺構からの堆土は両側に溜め、当初反転してその部分も調査を行う予定であったが遺構、包含層とともに広がらず、掘り下げは行っていない。2区では、1区と同様の黄褐色砂質土の上面でピット、土坑を検出し、縄文時代の包含層の調査を行った。3区ではピット状の遺構らしきものはあったが不明瞭で、遺物も出土していない。黄褐色砂質土も広がらず縄文土器包含層は確認できなかった。

検出した遺構は、1区では溝4本、土坑10基、ピット群、2区では土坑4基、ピット群を検出した。土坑のうち1つは鉄滓、炉壁を出土しており製鉄に関連する遺構と思われる。3区では土坑として掘り始めたものもシミ状のものであり、図示したピットにも疑問がある。

以下報告では、遺構の数も少ないため、特に区ごとに分けずに遺構、包含層を順に示していく。

2. 地層

調査区の北壁、東壁の上層を図示した。1層は水田工作土で水平堆積を示す。2層は北壁に現れる砂質土で西に僅かに傾斜した3層の上に堆積し1層の水田土を水平にする盤となっている。水田構築時に客土されたものか。3層は赤色がかった土で砂粒を多く含む。4層は砂礫を多く含む灰茶褐色土で北側ではされる。5層は暗茶色土で砂質の土が多い中で土壤かが進んで



第4図 1区北壁、東壁土層図 (1/80)

いる。7層は黄褐色砂質土で礫を多く含む。8層は、その上面で遺構検出を行った層で8a、b、c層は茶色が強い黄色砂層でdとともに縄文土器包含層である。以下は図示していないが、黄色砂層の40cmほど下で礫層になる。

3. 遺構と遺物

(1) 土坑

遺構は8層上面で検出した。土坑はやや粗砂を含んだ茶色土または黄褐色土で、砂層の面での検出であったため比較的容易であった。土坑としたもののなかには、くぼみ状のものもあり、遺構とするにはやや疑問があるものも掲載した。

S K 001 1区の北西隅に位置する土坑で5層上面から掘込んでいる。茶褐色砂質土を覆土とし、床は礫層に達する。粗砂混じりのピットにきられる。2.4×1.2mの長椭円形を呈し深さ45cmを測る。遺物は縄文土器の小片がほとんどで、1点のみ上師器の壊または皿と思われる小片が出土した。

S K 003 1区の北側中央に位置する土坑で茶褐色砂質土を覆土とする。1.15×0.7mの不整円形を呈し深さ30cmを測り中央はピット状のくぼみがある。縄文土器片が少量出土したのみである。

S K 004 1区の北側東よりに位置する土坑で茶褐色砂質土を覆土とする。1.4×0.8mの隅丸方形を呈し深さ7cmを測りくぼみ状である。遺物は刷毛目調整または擦痕が残る小片が1点のみ出土した。

S K 005 1区の北側東よりに位置する土坑で茶褐色砂質土を覆土とする。1.7×1mの長椭円形を呈し深さ8cmを測る。中央に深さ7cmの小ピットがある。遺物は縄文七器の小片のみである。

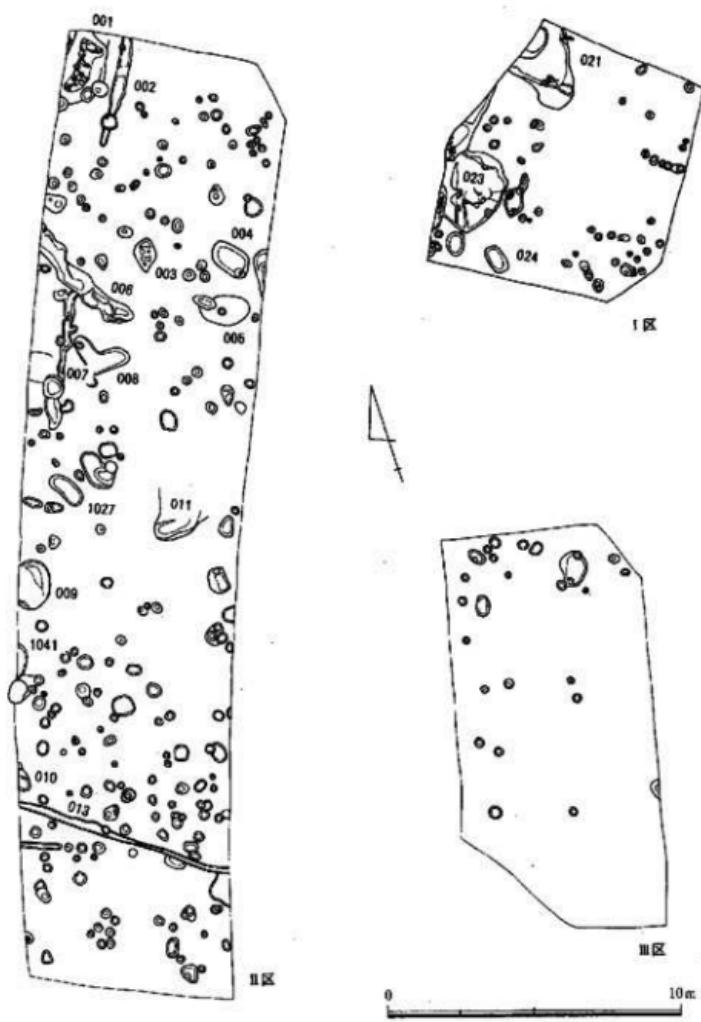
S K 008 1区の北側西よりに位置する土坑で黄褐色砂質土を覆土とする。深さ7cmを測る。遺物は出土していない。

S K 009 1区の中央西よりに位置する土坑で5層上面から掘込んでおり、暗褐色砂質土を覆土とし、下層は黒色砂層である。西側が調査区を出るが1.65×1.05m以上の楕円形を呈し、段がつき西に落ちる。深さ40cmを測る。遺物は縄文土器の小片のみである。

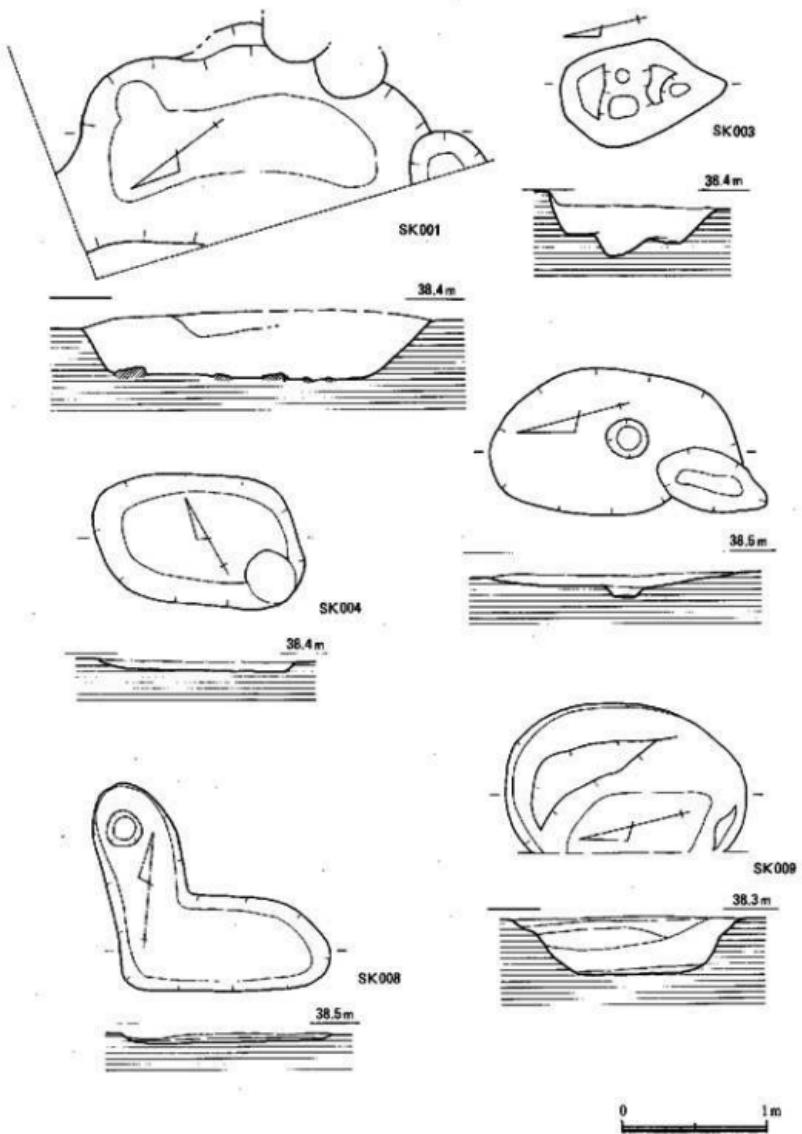
S K 010 1区の中央南よりの西壁にかかる土坑で8層上面から掘込んでおり、暗褐色砂を覆土とする。0.9×0.45m以上を測り南側がピット状に落ちる。深さ30cmを測る。遺物は縄文土器の小片のみである。

S K 011 1区の中央東よりに位置するくぼみ状の土坑で、茶褐色砂質土を覆土とする。1.8×0.8mの範囲に広がり、形ははっきりしていない。遺物は縄文土器の小片が多く出土した。

S K 021 2区の北西隅に位置する土坑で、層から切り込む茶褐色砂質土を覆土とし、下層は砂層である。調査区にかかる2m以上段落ち状で深さ40cm以上を測る。遺物は土師



第5図 調査区全体図 (1/200)



第6図 SK001、003、004、005、008、009実測図 (1/40)

器の壺と思われる。外面刷毛目調整、内面削り調整の土器の小片、土師器の皿または壺の小片、鉄滓、縄文土器片が出土した。

S K023 2区西側に位置する土坑で茶褐色土を覆土とする。粗砂混じりのピットにきられる。2.6×2mの不整円形を呈し、内側で段がつき1.45×1.3mの長方形に落ちる。深さ35cmを測る。段の内側には鉄滓とスサ入りの炉壁が散乱し、パンケース2箱分が出土した。他に縄文土器と時期のはっきりしない土器片が出土している。

S K024 2区の南西隅に位置する土坑で茶褐色砂質土を覆土とする。0.95×0.6mの隅丸長方形を呈し深さ25cmを測る。遺物は出土していない。

S K1027 1区の中央西よりに位置する土坑で茶褐色砂質土を覆土とする。1.3×0.6mの長楕円形を呈し深さ6cmを測る。遺物は上師器の椀の脚部の小片が1点のみ出土した。

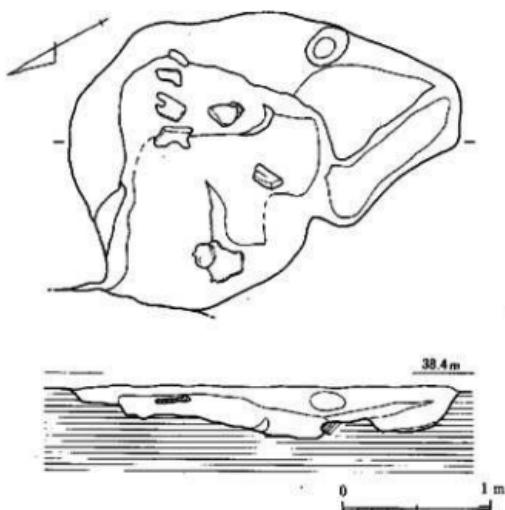
S K1041 1区の中央西壁にかかる土坑で5層上面から掘込んでおり、粗砂を含む暗褐色砂質土を覆土とし、下層は黒褐色砂層である。一部しか検出していないため規模は不明である。遺物は土師器の壺の小片が一点出土した。

(2) 溝状遺構

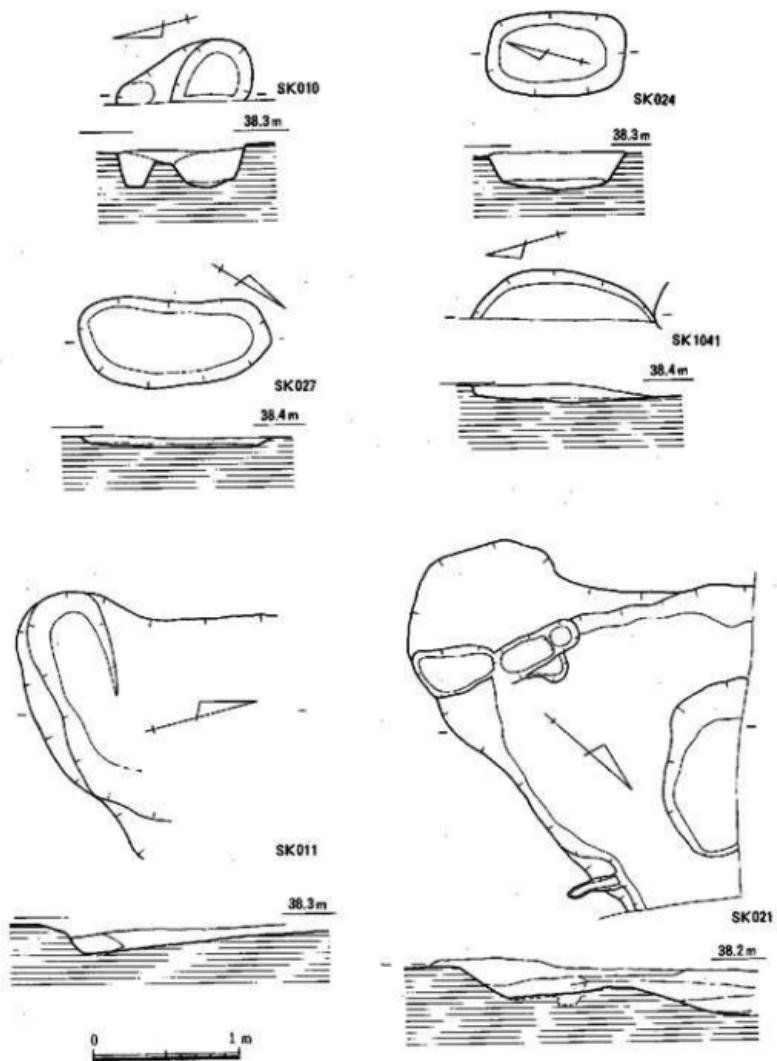
S D002 1区の北西隅で長さ3.3mを検出し、さらに北に延びる。幅40cm深さ12cmを測る。覆土は茶褐色砂質土である。遺物は縄文土器片が1点のみ出土している。

S D006 1区の北側西半に長さ4mを検出した。調査区の外西側に延びる。幅60cmを測る。深さは一定しておらず、15から36cmを測る。白色の粗砂が堆積する。遺物は縄文土器の小片のみである。

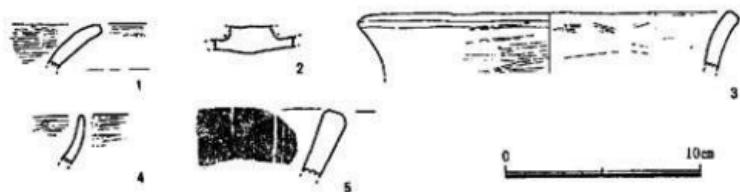
S D007 S D006に切られる南北方向の溝である。ピットによって切られる。長さ3m分を検出した。幅は一定せず15から50cmを測る。深さ13から25cmを測る。覆土は白色



第7図 SK023実測図(1/40)



第8図 SK010、024、027、1041、011、021実測図 (1/40)



第9図 ピット出土遺物実測図(1/3)

粗砂である。遺物は縄文土器片が出土している。

S D013 1区南側に東西方向に走る溝で調査区を横ぎる。幅30cm深さ10cmを測る。覆土は茶褐色砂質土である。遺物は縄文土器が出土している。

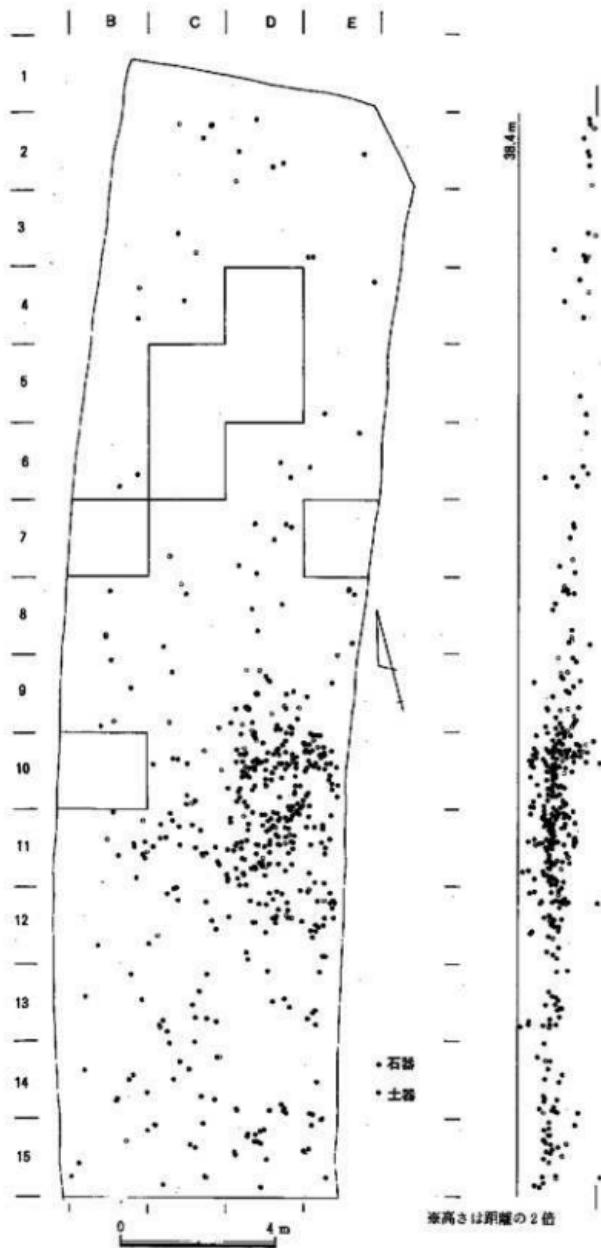
(3) ピット群

1区を中心にピットを検出したがまとまりを見いだすことはできなかった。覆土は淡灰色、灰褐色、暗褐色の砂質土の三者がある。出土する遺物は縄文土器である場合が多い。若干ではあるが弥生、古代、中世の遺物が出土した。1は弥生時代中期の広口口縁の壺と思われる。内面は刷毛目調整、外面は刷毛目調整のちナデている。2は須恵器の蓋のつまみ部である。3は口縁部片で外面は研磨調整で一部ナデしており、煤が付着する。時期は不明。4は壺の口縁部で外面には横ナデを施し、赤色顔料を塗っている。5は上師質の擠り鉢で内面刷毛目調整で擦り口が2本見られる。

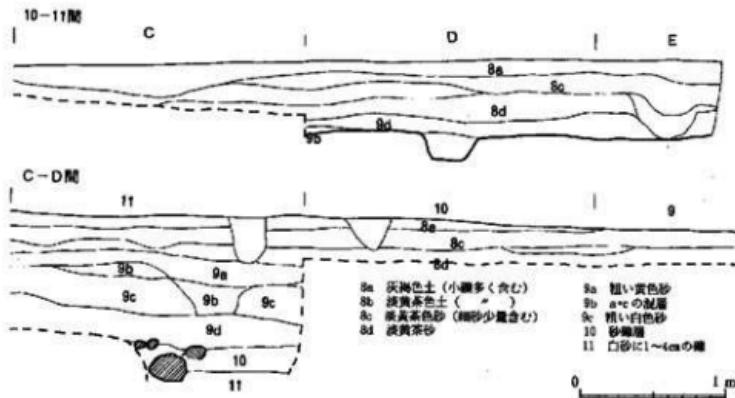
(4) 縄文土器包含層

遺構の調査終了後、縄文晩期の包含層である8層を調査した。8層掘り下げにあたっては、2m方眼のグリッドを設定し、各グリッドの北と東に土層観察用のベルトを残しながら行った。出土した遺物は小片ではあったが、1点ずつ平面的位置と標高を記録しながら取り上げた。遺物は8a、b、c層に多く、d層に少なかった。取り上げに際しては8a、b層と8c、d層とに分離した。8a、b層は茶色が強く粗砂や小砾を含み8グリッド以南、Eグリッド以東に分布する。8c層の下は白色の砂層で3個所ほど掘り下げてみたが遺物は出土しなかった。その下の土層観察をD11グリッドで行った。

遺物は縄文晩期前半におさまるもので番号をつけて取り上げた。整理においては接合作業の後、器種だけでなく個体識別できるものを抽出し、それについての分布を示そうと試みたが時間的余裕がなく今回示すことができなかった。第10図に出土遺物全体の分布を示す。調査区全域から出土しているが、北の方は薄く、D、E 9、10、11、12グリッドに集中している。以下、出土遺物を示す。

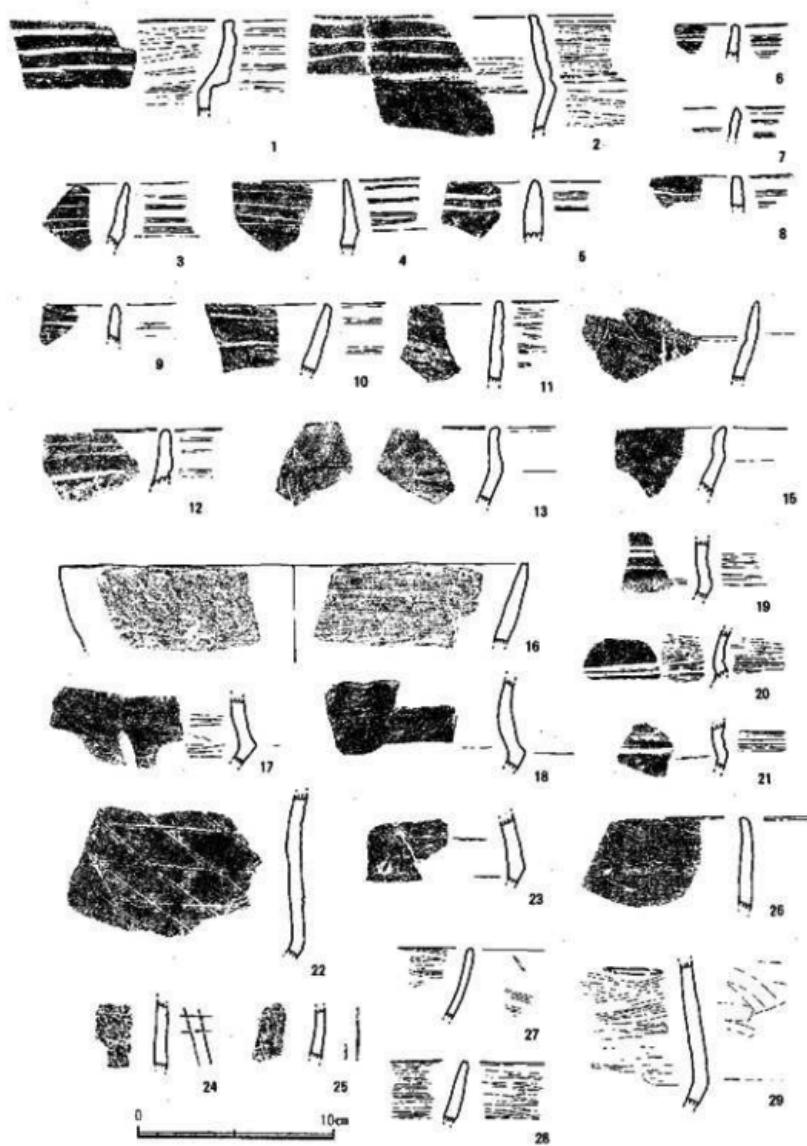


第10図 繩文時代遺物出土分布図 (1/150)

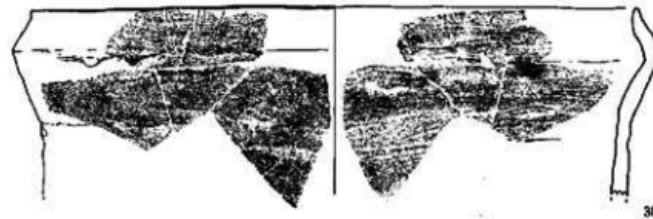


第11図 包含層グリッド上層図 (1/40)

1から34は深鉢で口縁部を持つものと、研磨調整を施すなどして35以下と比べると精製なつくりのものである。1から12は口縁部に沈線を施す。1は口縁部で急に屈曲し頸部との間に段を形成する。口縁部内面は研摩、外表面は横ナデ、頸部は削り状で粗い。9までは内外面を研磨調整するが粗く光沢もない。ヘラナデとすべきか。6、7は中でも丁寧な研磨調整を施す。7は内面に低い段がつく。10、11は削り調整を施し11には粘土の溜まりが付着する。色調は灰褐色から茶褐色で暗めである。13、14、15は短くやや内湾する口縁部をもち、沈線を施さない。14は黄褐色を呈し明るい。12、13は口縁部に強い横ナデ調整を施し、灰褐色を呈す。16は口縁部が開き、頸部に直接つくものと思われる。外表面は粗い削り調整を施し、淡橙色を呈す。17から23は胴部から頸部への屈曲部である。17、18は外表面に擦痕が、内面には研磨調整を施す。同一個体か。19から21は頸部に沈線を施し研磨調整である。22から26には頸部に斜交する沈線を施す。26は粗い研磨調整を施し外表面に煤が付着する。27は器壁が薄く、椀状になるものか。内面研摩、外表面ナデ調整である。28は僅かに内湾する口縁部に頸部がつく。丁寧な研磨調整により光沢がある。30から34は同一個体の可能性がある一群で、短い口縁部は僅かに内湾し頸部から胴部へ屈曲する。胴部内面は縦方向の研磨もしくはヘラナデ調整、外表面は斜方向の削り調整で、頸部は内面横ナデ、外表面は削り後ナデ調整を施す。30は内面に横方向の研磨調整を施す。口縁部は外表面はナデ調整で内面は横ナデまたは研磨調整を施す。内外面ともに淡橙灰色を基本に暗灰色から淡茶色を呈す。また、焼きは固い。31には浅く細い沈線が施される。



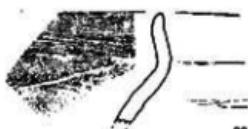
第12図 繩文時代包含層出土遺物実測図1 (1/3)



30



31



32



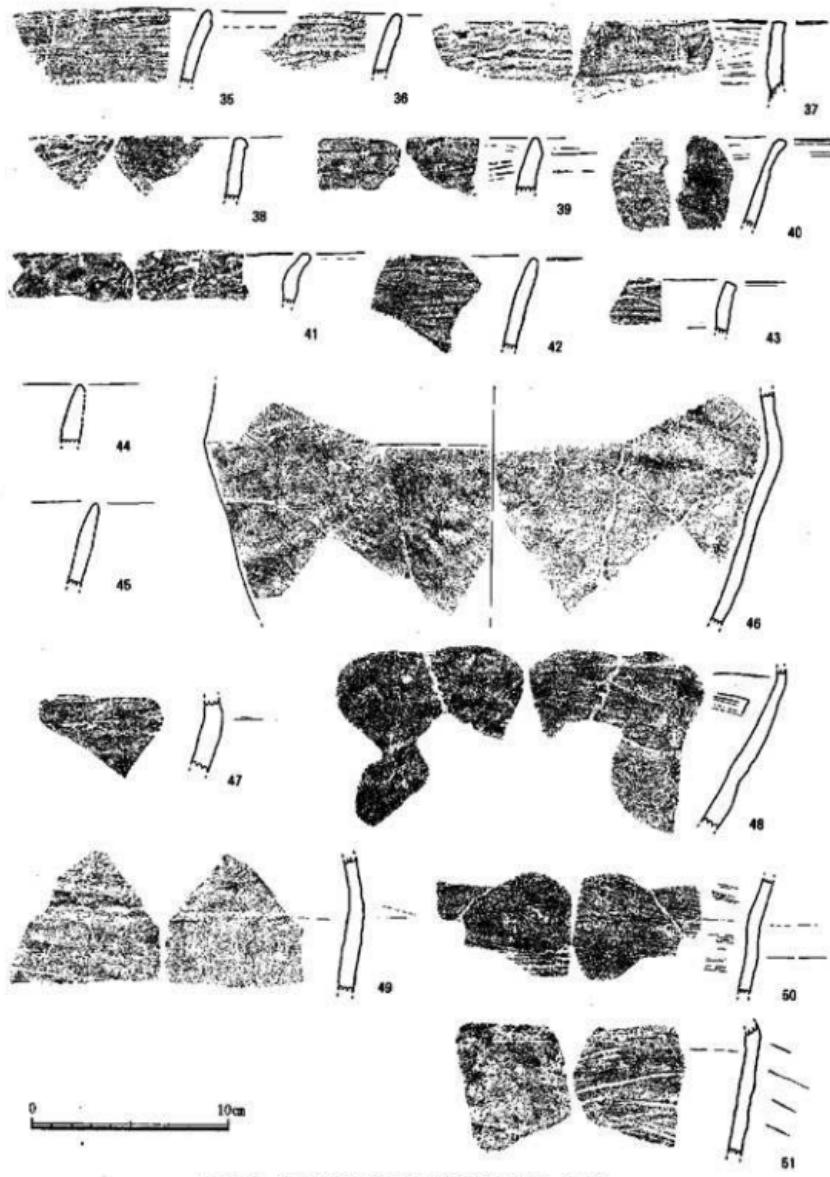
33



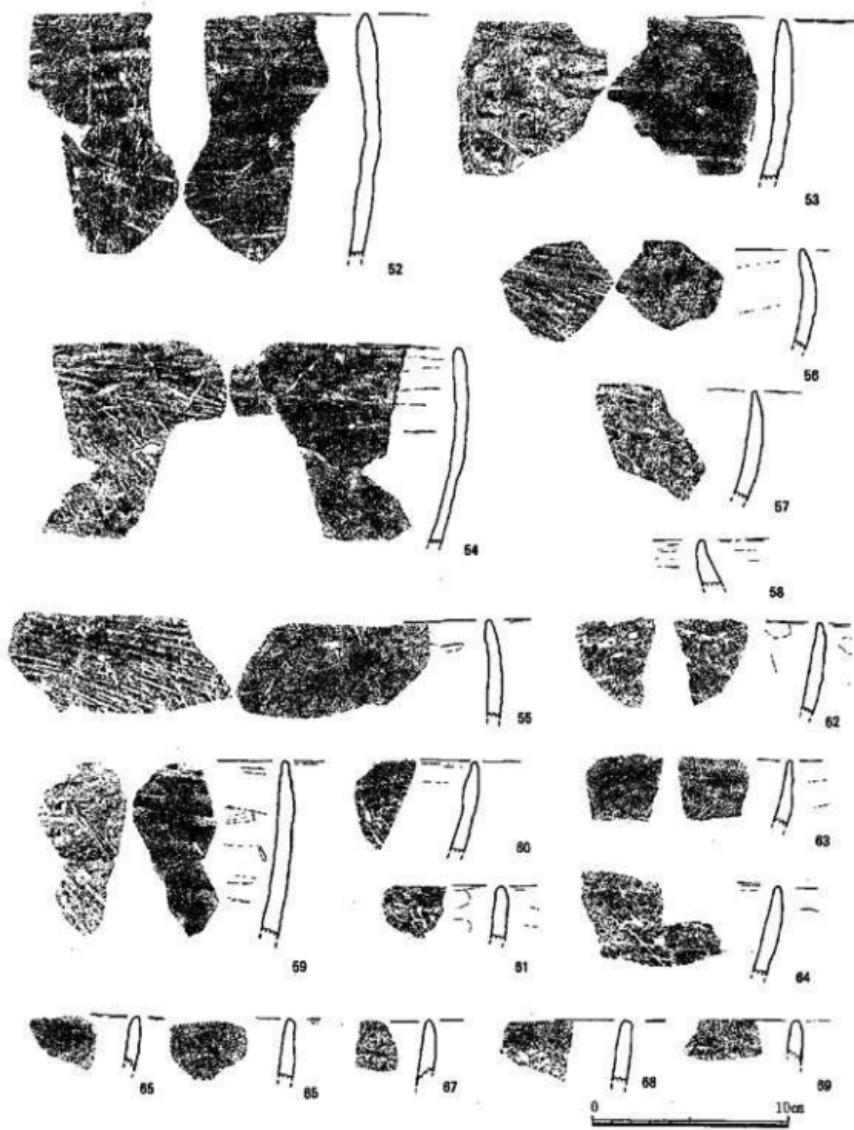
34



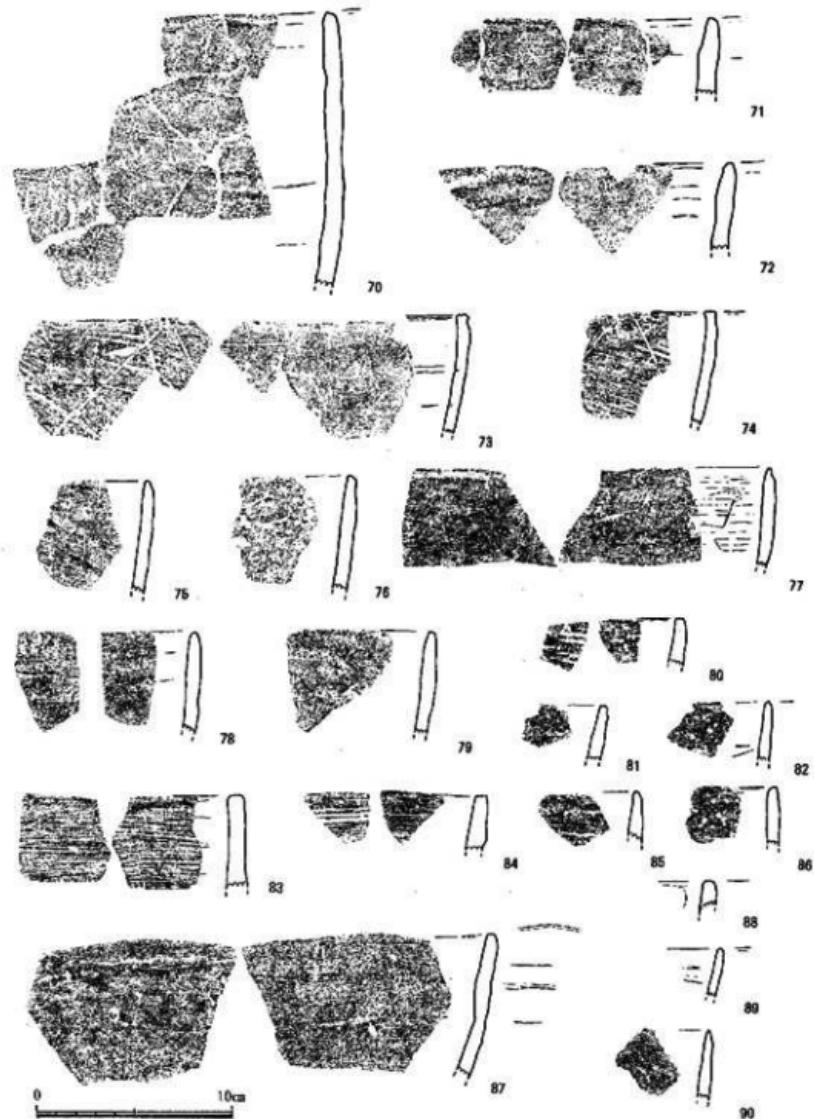
第13図 繩文時代包含層出土遺物実測図 2 (1/3)



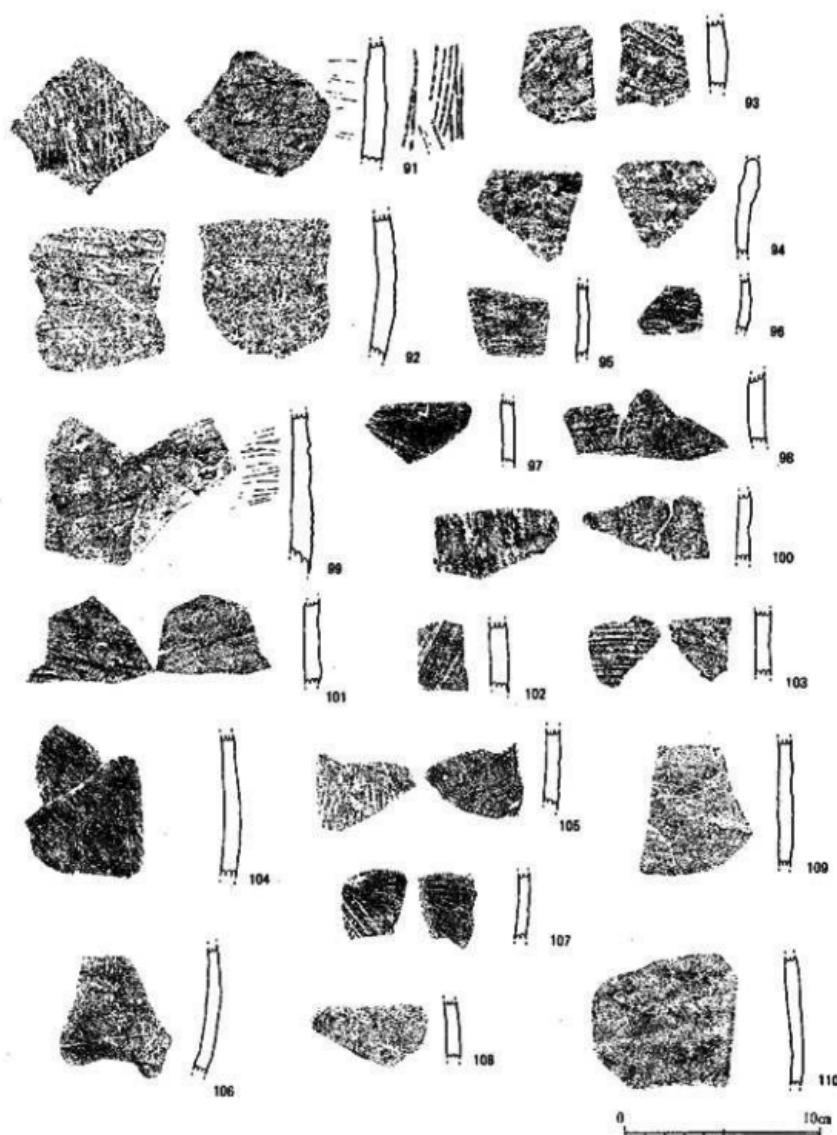
第14図 繩文時代包含層出土遺物実測図3 (1/3)



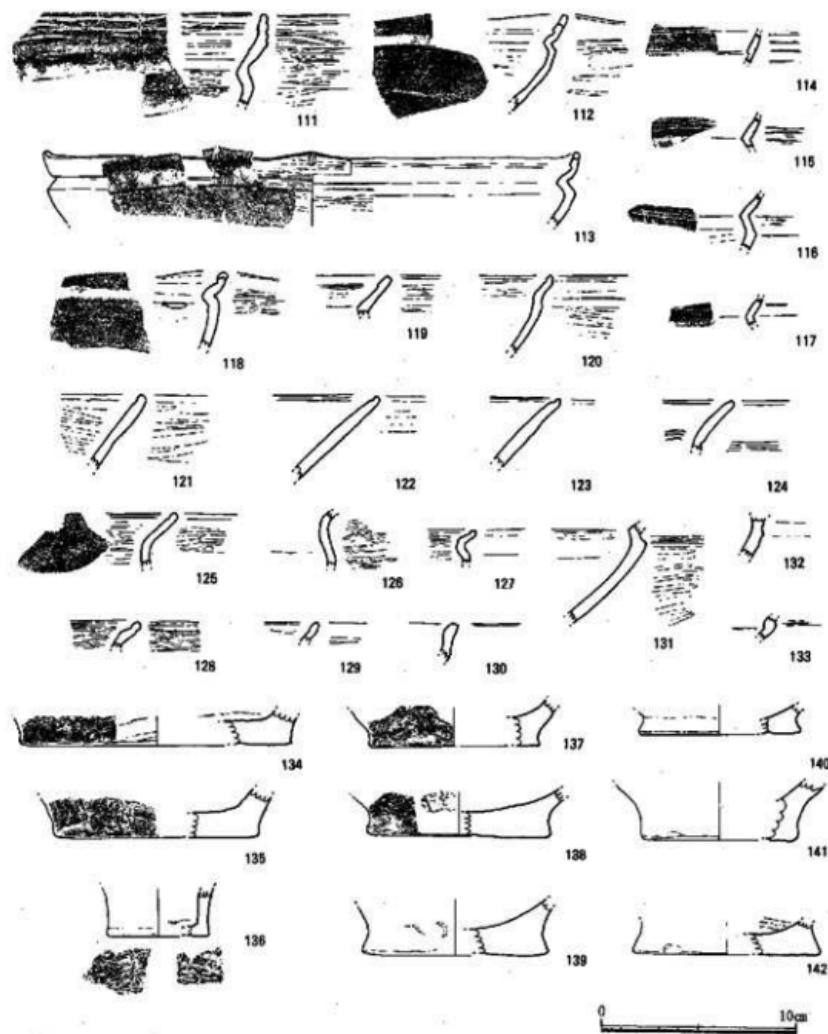
第15図 繩文時代包含層出土遺物実測4 (1/3)



第16図 繩文時代包含層出土遺物実測図 5 (1/3)



第17図 繩文時代包含層出土遺物実測図 6 (1/3)



第18図 繩文時代包含層出土遺物実測 7 (1/3)

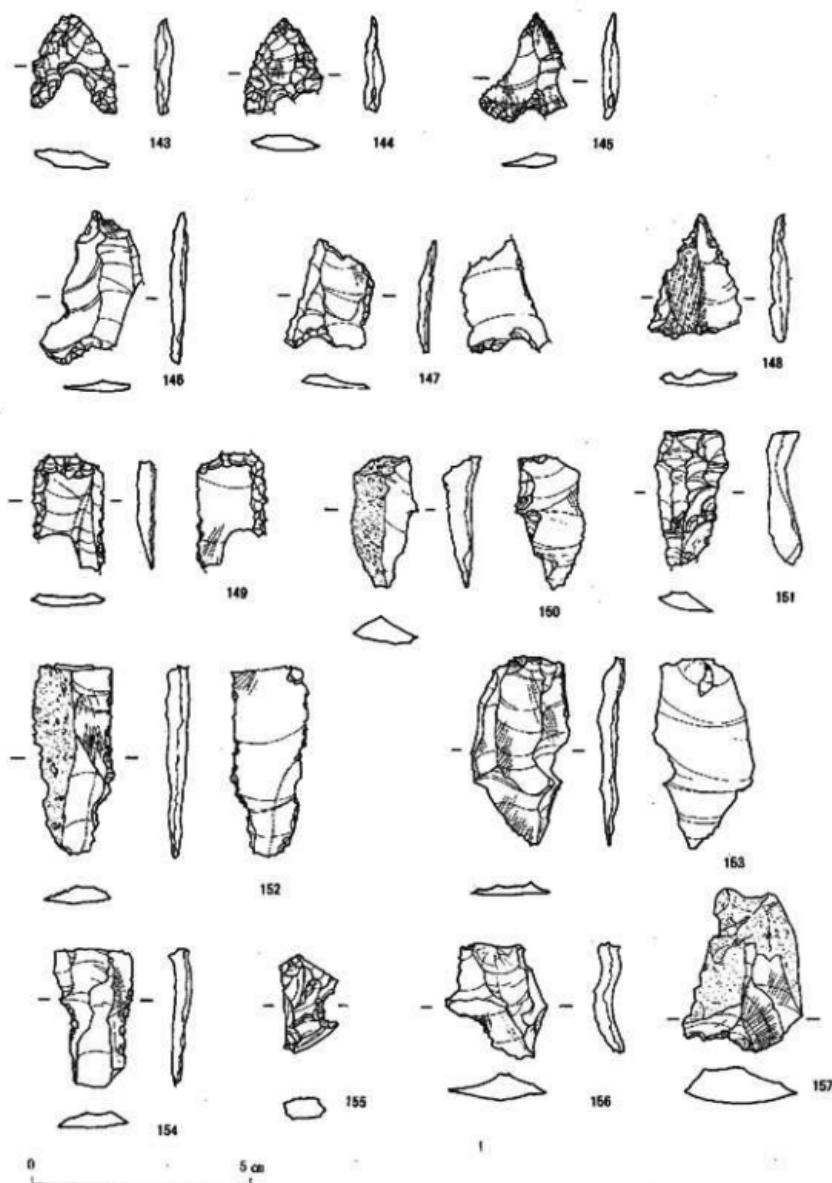
35から110は粗製の深鉢である。35から51は頸部から胴部へ屈曲し、口縁部が開くもので、口縁部のみのものは下部の器形は不明である。35から41は外面に削り調整を施す。36、37の削りは粗く7mm幅にくぼみ、調整間は稜をなす。41は気泡が多くみられ、種子圧痕らしきものも見られる。淡黄色を呈し、部分的に橙色を呈す。胎土に砂粒が少なく軽い。42、43は外面に二枚貝による条痕を施す。焼きが硬い。44、45はナデ調整で細砂粒を多く含む。46から51は屈曲部で外面に横方向の削り調整を施す。内面は擦痕がみられ、50は刷毛目状である。51は深く鋭いヘラ状の工具による調整がみられる。

52から90は内湾または直口する口縁部を持つものである。52、53は粗い削りの後にナデ調整を施し、内面は粗いヘラナデ調整を施す。暗灰色を呈し、同一個体と思われる。54、55は外面に斜方向の条痕、内面には横方向の削り調整を施し、灰褐色を呈す。56は口縁部が僅かに屈曲し口縁帯状を呈す。浅い条痕調整を施し、口縁帯状部分は沈線にも見える。59は条痕状の削り調整がみられる。60から69は削り調整の後にナデ調整を施す。70から72は外面を削り調整を施す。淡茶色を呈し内面は白色を呈す。砂粒を多く含み、同一個体と思われる。73は外面に条痕状の調整痕が残り、浅い沈線が山形に施される。淡茶色を呈し、内面には粘土帶接合痕がみられる。74は同一個体と考えられる。75から90は83を除いて削り調整の後にナデ調整を施す。83は内外面ともに細密条痕を施す。87は削り調整で、口縁部が緩い山形を呈す。内外面に粘土帶接合痕が残る。

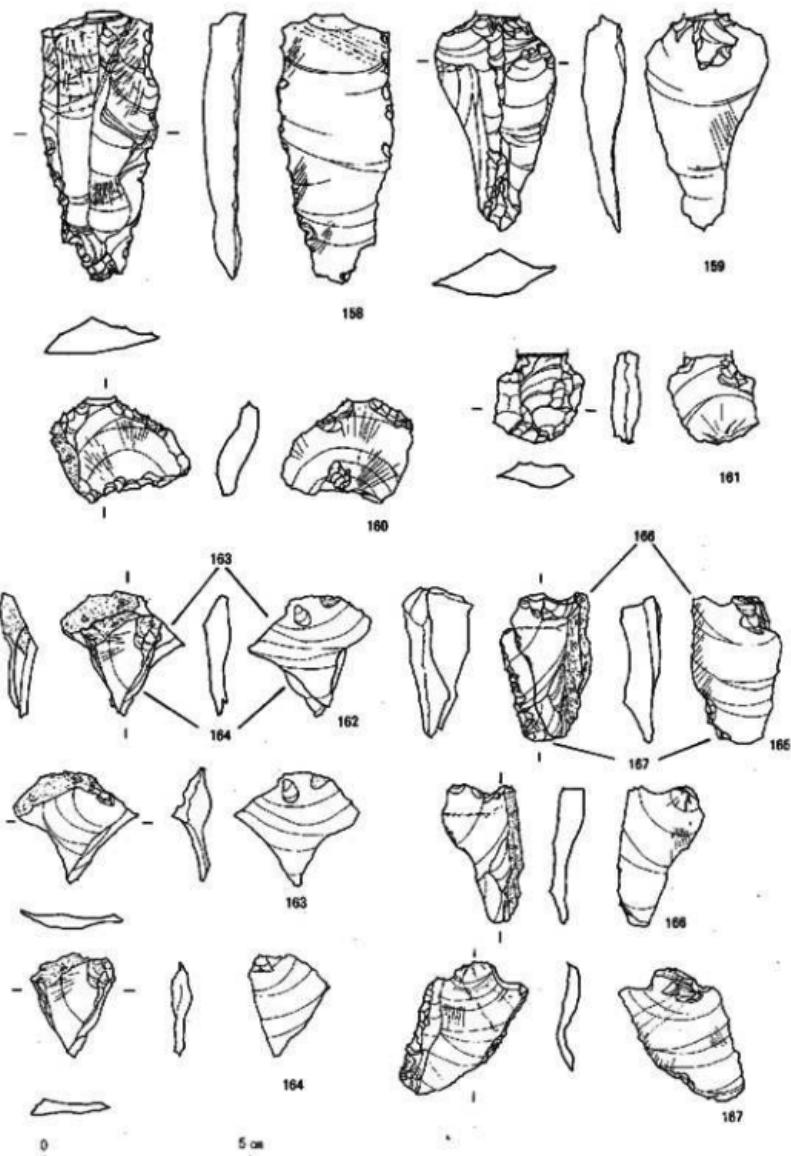
91から110は胴部破片である。97から99は今回削り調整としたものである。91は一定方向ではあるものの単位がはっきりしない粗い調整で、纖維の束で削ったように見える。砂粒が大きく動く。93は7mm幅ほどの凹部が斜方向に施される。94は1.3cm幅の単位で板状の工具でナデたのか工具端による段がみられる。95、96は細密な砂粒の動きが一定方向で単位を持たない。99は方向の一定しない1cm強幅の深い擦痕が施されその間は稜をなす。94は3mm幅のヘラナデで、ナデが深いため穂が付く。

100から107は条痕調整を施す。100は2枚貝による条痕である。101は2枚貝によると思われるが単位がそろわざナデ調整のためにつぶれる。102、103は条痕の凹部の幅がやや広く、その中にさらに細い擦痕がみられる。104は削り調整の後に2枚貝により浅くナデるように条痕を施す。108から110は削り調整の後にナデている。

111から133は浅鉢形の粗製土器である。111は直に立ち上がる口縁帶に3条のヘラ描き沈線を施す。丁寧な研磨調整を施し器面には光沢がある。黒色を呈す。112と113は山形に隆起する口縁部を持つ。112は研磨調整の下に削り痕がみられる。113は隆起部に凹点を打ち、丁寧な研磨調整で光沢がある。114から116は口縁部に細い沈線を持つ。研磨調整で淡黄色を呈す。同一個体と思われる。118から120は口縁帶が退化し、119、120は頸部がやや長くなる。121から125は頸部が長く伸び、口縁帶がつく形態のものが退化し、口縁内の沈線のみになったもので



第19図 繩文時代包含層出土遺物大割図 8 (2/3)



第20図 細文時代包含層出土遺物実測図9 (2/3)

ある。128、129は球形の胴部を持つ浅鉢である。128は特に丁寧な研磨調整を施し光沢が著しい。130は小片ではっきりしないが逆く字形の口縁部を呈すと思われる。131から133は頸部の屈曲部で113に近い器形を持つと思われる。

134から142は深鉢の底部である。134は底部内面が屈曲し、器壁が幾分薄くなる。136も同様で、全体的な器壁も薄く気泡がみられる。他は台形底を呈し外面は削り調整を施す。

以下図示した石器は全て黒曜石である。143～149は石鐵である。143、144は両面加工のものである。143は姫島産の石材と考えられる。長さ2.4cm、幅1.9cmを測る。144は鋸状の加工があり、わずかに主剥離面を残す。脚部は欠損する。145～149は片面に主剥離面を残す剥片鐵である。145は形が元の剥片に大きく規制され脚が広がる。長さ2.6cmを測る。147は両サイド、抉り部に僅かに調整を施す。148には自然面が多く残り両サイドにこまかな調整を最小限施す。長さ2.7cm、幅2cmを測る。149は長方形を呈す。150～154は縦長剥片を利用した刃器と思われる。152は片側全体に、153には基部の一部に細かな調整を施す。157はかなり自然面を残し2次調整も加わっていない大型の剥片である。158、159も縦長剥片を利用した刃器であるが、頂部両脇に丁寧に抉りを作り出す。160、161は石匙状に頂部両脇に抉り部を作り出す。162は163、164との、165は166、167との接合資料である。163、164ともに二次調整使用痕とともに見られない。166も調整等は見られないが、167は2次調整を施し、頂部両脇に抉り部を作り出している。

IV おわりに

時期不明の遺構と縄文時代晚期を中心に古代、中世の遺物が出土した。繰り返しになるが時期ごとにふれておきたい。

縄文時代の遺物はすべて晩期におさまるものであるが、その中で時期幅がある。

深鉢は胴部で屈曲し口縁帯を持つやや精製のもの（1、13等）、直口する口縁部が外反するもの（25、26等）、直口する口縁部がやや内湾ぎみのもの（52、53等）がある。口縁帯を持つものは晩期前半中葉古闕式に含まれるものが多いと思われる。その中でも1は口縁帯の屈曲がはっきりしており前葉の広田式になるものか。粗製の深鉢は時期を決め難い。後葉の黒川式に入るものも多いと思われる。浅鉢では111が最も古手で前葉のものである。口縁帯が直に立ち上がり研磨調整が丁寧で光沢がある。114から120は短い頸部を持つ中葉の古闕式に含まれるものである。113、118は波状口縁でやや古い資料であろう。120から126は長い頸部に短い口縁部がつく器形のものの、口縁帯、屈曲が縮小されており編年的位置がつけにくい。後葉の黒川式に入るものか。128、129は球形の胴部を持つ黒川式の典型となるものである。

石器は110点出土したうち、4点がサヌカイトで残りは黒曜石である。図示していないが剥

片と共に石核も出土しており、また接合資料の存在から、調査地点内で石器製作が行われたことは言えるであろう。

第10図に縄文時代包含層の遺物の分布を示した。遺物は2区全域から出土しているが、特にD・E-10・11グリッドに集中する。遺構の存在も考えられるが10-11グリッド間の土層（第11図）観察では確認できなかった。一部同一個体と考えられる資料の分布を検討したところ、30～34との同一個体資料は2m四方の範囲に分布接合し、その位置が意味のあるものと考えられる。しかし、10m離れた破片が接合する例もあり、今後さらに個々体の分布の検討を行い包含層形成過程を追いたい。

縄文時代以降は若干の遺物のみである。弥生時代については第9図1が出土しているが遺構ではなく、遺物も流れ込みと思われる。その後は、古代と思われる遺物が出土している。取り上げた上坑、ピット群はあえて言うならこの古代のものが多い可能性が高いと思われる。中世の遺物は5だけである。遺構は性格がわかるものはSK023くらいで、あとは不明である。中に自然のくぼみである可能性もある。ピットもつながりを見出せなかった。

SK023からは鉄滓が多く出土している。スサ入りの炉壁や炉外流動滓が出土しており大鐵冶関連の遺構と思われる。しかし、炉壁等はまとまりを持っているわけではない。廃滓坑であろうか。SK021、022、025、SP1013、1026、1052、1103、1104、1105、1106、1107、1108からも鉄滓が出土しており周間に製鐵関連の遺構があるものと思われる。土器の出土がなく時期は決められない。近接する東入部遺跡7次調査において、古代から中世の鐵冶遺構が検出されている。⁽¹⁾また岩本遺跡1次調査で古代から中世初頭、安通遺跡1次調査では11世紀末から12世紀初頭、東入部遺跡4次調査においては古代の製鐵関連の遺構が検出されている。⁽²⁾荒平山西麓から室見川東岸にかけて類似遺構の分布が知られるようになってきている。SK023もこれらに連なる1例であろう。

注

- (1) 1993年 福岡市教育委員会調査
- (2) 1991 井沢洋一『入部II』福岡市教育委員会
- (3) 1993 浜石哲也、榎本義嗣編『入部IV』福岡市教育委員会
- (4) 1994 池田祐司編『東入部遺跡群1』福岡市教育委員会

図 版



(1) 1区全景（南から）



(2) 2区全景（南から）

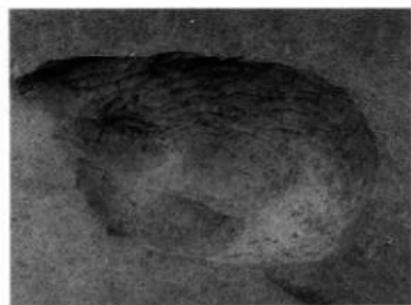
図版 2



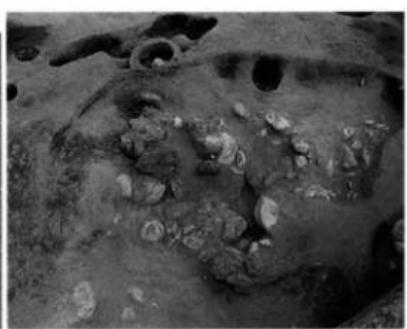
(1) SK001(東から)



(2) SK009(東から)



(3) SK003(西から)



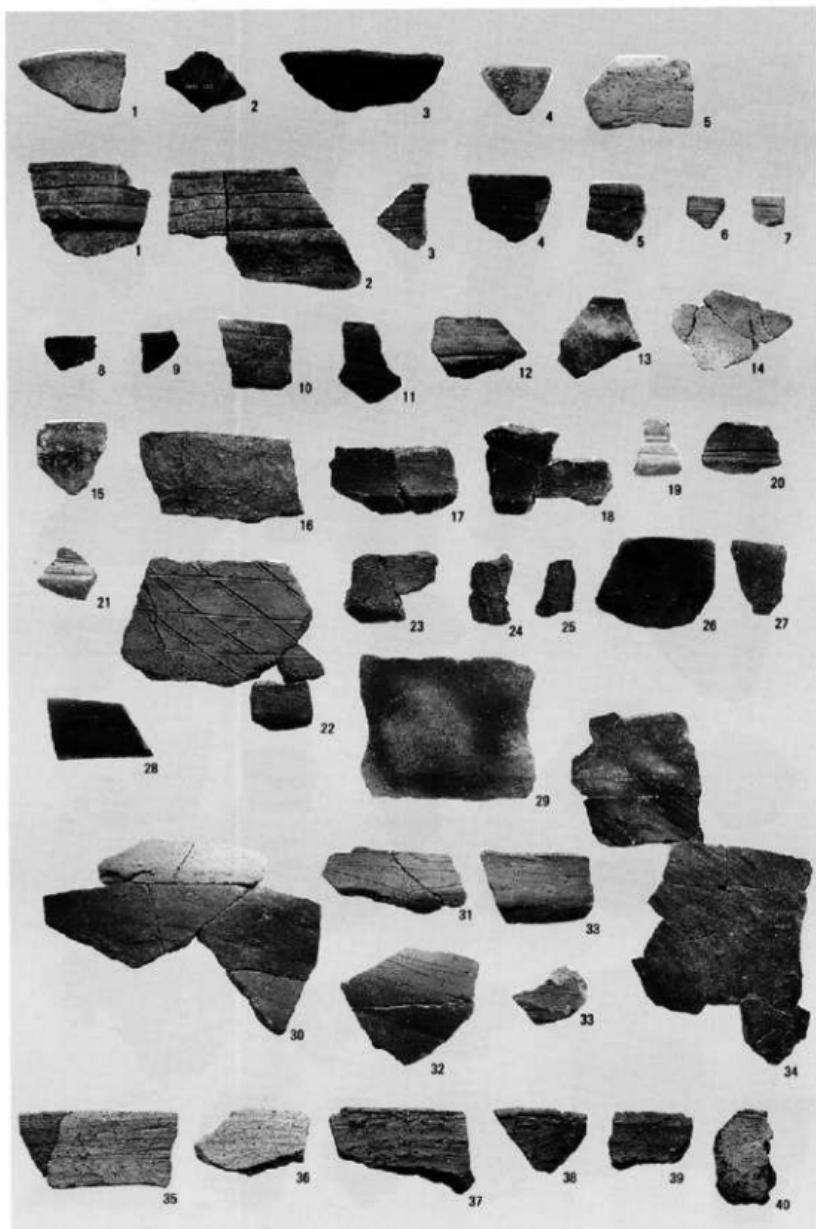
(4) SK023(西から)



(5) 縄文時代遺物出土状況(西から)

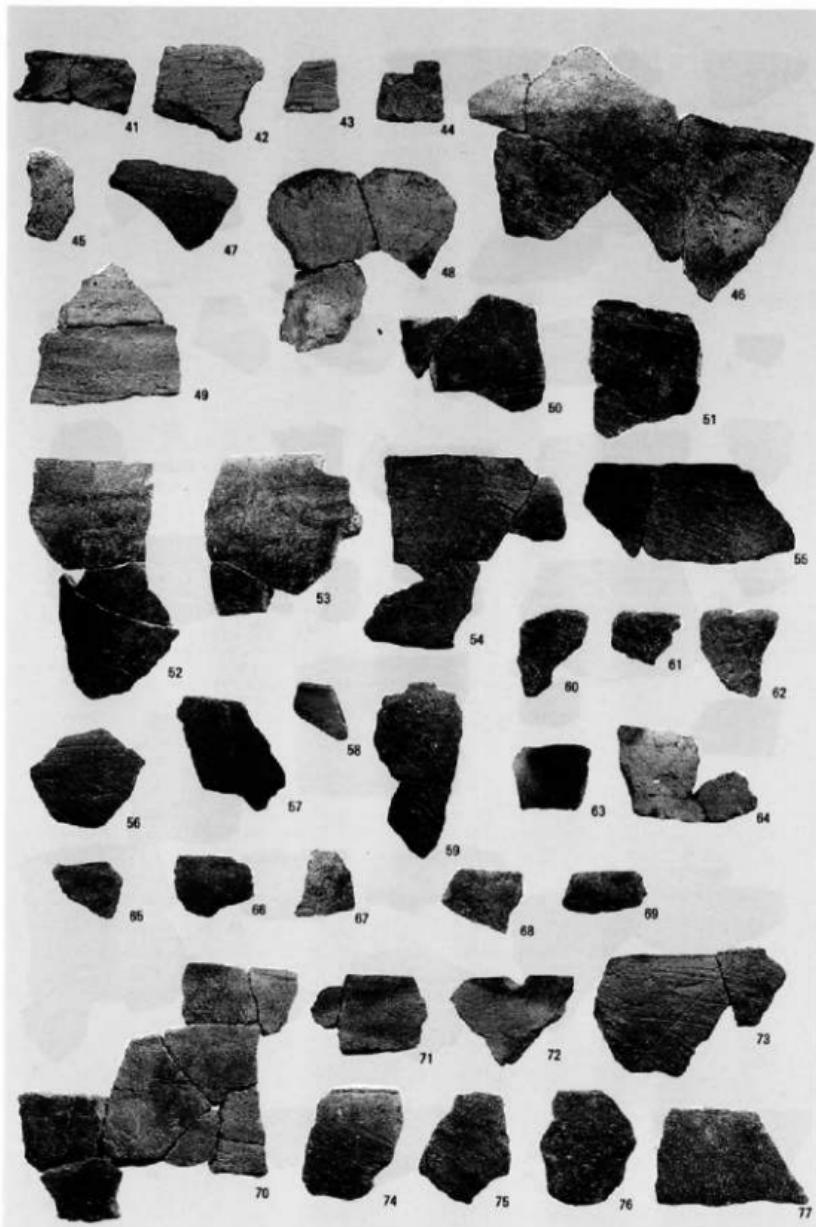


(6) D11グリッド西壁

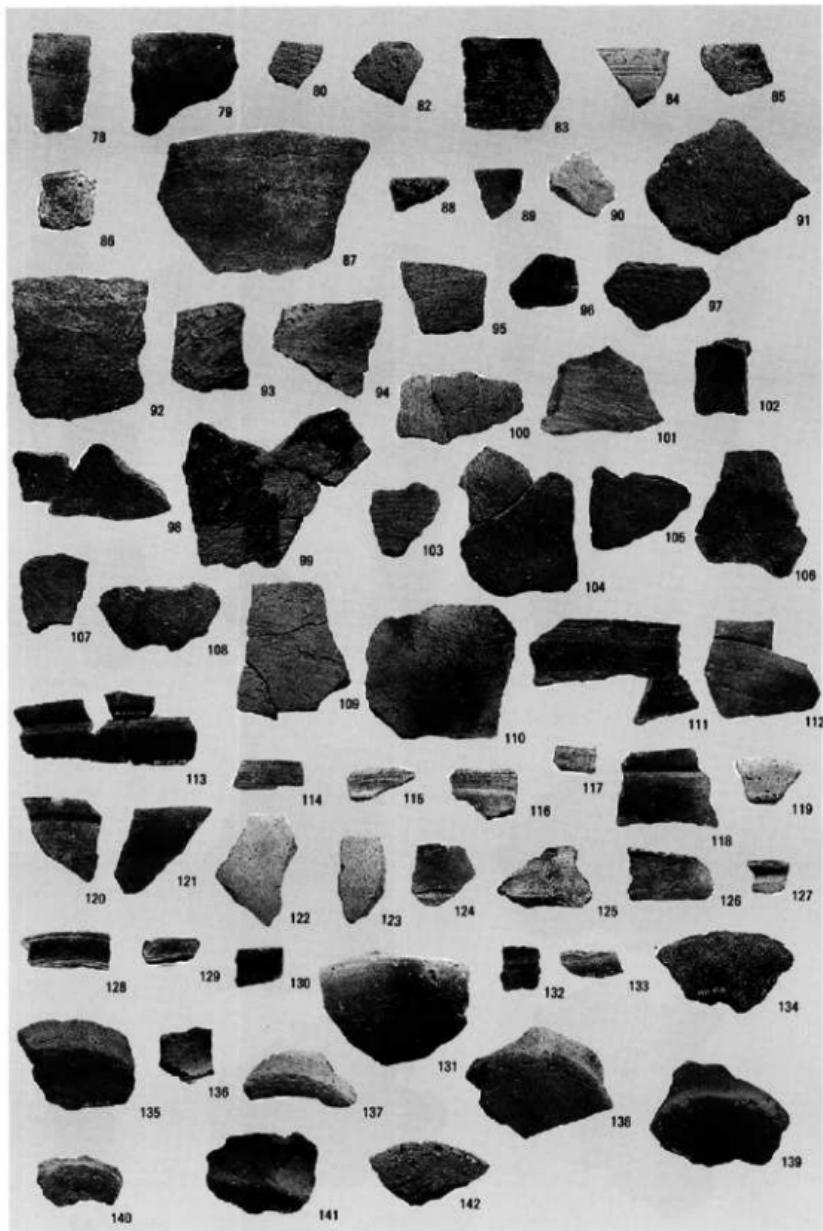


出土遺物 I

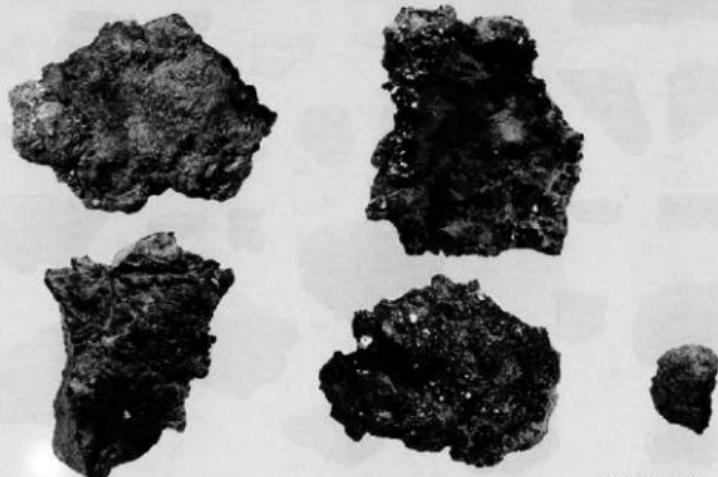
図版4



出土遺物 2



図版 6



東入部遺跡群3

東入部遺跡群第6次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第383集

1994年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 (株)松古堂印刷
